

# 新書紹介

## 環境計画論

田村 明著

鹿島出版会 B6判 一、二〇〇円

## 新しい街路のデザイン

デザイン委員会

イギリス都市計画協会

鹿島出版会 B6判 一、八〇〇円

共編

常々、小樽運河と倉庫群をな

ぜ、潰したり、壊したりしてしまふのかと単純で素朴な疑問を感じていた。小樽の街の歴史的象徴ともいえるそれらを撤去して、国道の渋帯を解消するため、道路にしようという計画なのである。

この計画には次のような発想があるかと思う。第一にかつて股賑をきわめ、有用であったものを時代の推移で無用の長物となるや経済的効率がないう視点だけで破壊しようという考え方。第二に、相変わらずの車をなによりも優先する考

え方である。これらは高度成長長期に支配した思考の型即ち効率一点張り、偏頗な狭い機能主義、車優先、縦割り行政—そのままである。しかし、環境計画論の著者のいう都市を計画するという視点からみると、先人の英知の結晶であった倉庫群や運河を潰すという計画は脆くも崩れざる。著者はいうのである。「総合性のない個別的な観点だけからの環境の変造は、人類の生存をあらゆるかもしれないのである。もはや、個人や企業がそれぞれ個別的な理由だけ

で環境を無秩序に変えてゆくことはゆるぎない。もちろん、公的な事業である水面の埋立てや、道路の建設といったものにしても、事業の論議だけで遂行されてはならない。これからは人類全体の智慧として環境の変化を十分予見しながら、計画的に環境を変えてゆくことが必要である」と。著者はつづけていう。「環境は広くいえば地球全体だが、またサブ環境として、地域ごとのまとまりをもつ」と(第一章P12~P13)。

地球的視点をもって、環境を計画的に変えていくことが必要であり、環境計画とは新しい環境の開発であり、創造なのである。ところで、わが横浜においてはドブ川となった吉田川は公園となって新生した。新港埠頭に

ある煉瓦倉庫はたんなる無味乾燥な文化財として残すのではなく、新しい活用を計り水際公園の一部とし公園と一体化する構想なのである。まさに環境を新しく変え、長期的総合的視点、生きた哲学があるといえる。さらに、読者が横浜の都心、プ

ロムナード、大通り公園の項(第五章実践三四)を読めばこれらの計画が決してすでに終了し完結したものではなく、これから将来に向かって横浜市全体に新しい影響を及ぼし、新たな価値を生みだしていく、そして、ことを理解するであろう。

環境計画論全章を通じて、絶妙なバランス感覚、長期的展望に立った都市への愛着が溢れている。そしてなによりも環境計画論(その中に含まれる都市計画論)が実は文明論であり、今日の人間論であることを読者は感取するであろう。また著者は環境を総合的にコントロールするための脚本家であり、演出家である新しいプランナーの出現と胎動を熟っぽく語っているのである。

一方、「新しい街路のデザイン」は欧米の街路空間の形成に關し、豊かな経験に基づいて書かれており、特にイギリスのそれを中心に解説されている。翻訳文につきものの文章の読みくさはあるものの欧米各国の街路や街路の照明機、店舗や多様なストリート・フアニチュアの

カット写真を豊富にのせて、読者の眼を楽しませてくれる。日本の現在の各都市の画一的没個性的、車優先の街路と比較するとき、疾風のように吹き抜けていった高度成長期の後にくる、よりヒューマンな文化の時代にふさわしい想像力豊かで、より生活に根ざした、創造的なデザイン能力に裏打ちされた発想をもって街路を創りあげる必要を痛感する。

環境計画論でも環境のデザインが述べられている。ここでは街路とか道路、広場等の個体のそれではなくより広い高次の環境における相互関連のデザインとしてのアーバンデザインが論じられている。二冊を一体として読めば、読者は都市に対するより広い視野と展望を得ることができよう。

〈教育委員会教職員第一課

宮崎正孝〉